

対談 谷川俊太郎&洲浜昌三

わたしのことばさがし

詩の魅力を活かす対談と朗読

朗読

谷川俊太郎

劇研「空」(大田市演劇サークル)

自己紹介

私は背の低い禿頭の老人です

もう半世紀以上のあいだ

名詞や動詞や助詞や形容詞や疑問符など

言葉どもに揉まれながら暮らしてきましたから

どちらかと言うと無言を好みます

私は工具類が嫌いではありません

また樹木が灌木も含めて大好きですが

それらの名称を覚えるのは苦手です

私は過去の日付にあまり関心がなく

権威というものに反感をもっています

斜視で乱視で老眼です

家には仏壇も神棚もありませんが

室内に直結の巨大な郵便受けがあります

私にとつて睡眠は快樂の一種です

夢は見ても目覚めたときには忘れていきます

ここに述べていることはすべて事実ですが

こうして言葉にしてしまうとどこか嘘くさい

別居の子ども二人孫四人犬猫は飼っています

夏はほとんどTシャツで過ごします

私の書く言葉には値段がつくことがあります

二十億光年の孤独

人類は小さな球の上で

眠り起きそして働き

ときどき火星に仲間を欲しがったりする

火星人は小さな球の上で

何をしてるか 僕は知らない

(或はネリリし キルルし ハララしているか)

しかしときどき地球に仲間を欲しがったりする

それはまったくたしかなことだ

万有引力とは

ひき合う孤独の力である

宇宙はひずんでいる

それ故みんなはもとめ合う

宇宙はどんどん膨んでゆく

それ故みんなは不安である

二十億光年の孤独に

僕は思わずくしゃみをした

詩集『六十二のソネット』より

四十一

空の青さをみつめていると

私に帰るところがあるような気がする

だが雲を通ってきた明るさは

もはや空へは帰ってゆかない

陽は絶えず豪華に捨てている

夜になっても私達は捨うのに忙しい

人はすべていやしい生れなので

樹のように豊かに休むことがない

窓があふれたものを切りとっている

私は宇宙以外の部屋を欲しない

そのため私は人と不和になる

在ることは空間や時間を傷つけることだ

そして痛みがむしろ私を責める

私が去ると私の健康が戻ってくるだろう

六十二

世界が私を愛してくれるので
(むごい仕方でもた時に
やさしい仕方で)

私はいつまでも孤りでいられる

私に始めてひとりのひとが与えられた時にも
私はただ世界の物音ばかりを聴いていた
私には単純な悲しみと喜びだけが明らかだ
私はいつも世界のものだから

空に樹にひとに

私は自らを投げかける

やがて世界の豊かさそのものとなるために

……私はひとを呼ぶ

すると世界がふり向く

そして私がいなくなる

愛について

何を迎えようとして
お前は咲いていたのか
おまえは解っていたのか
闇を

歓びの中で終わっていたらうか
僕はおまえを通ったにすぎない
おまえは知っていたか
僕がどこまでも帰ってゆこうとしたことを

愛は僕に大きすぎた

おまえはたしかめたのか
肉を

僕の信じそして僕の通りすぎたものを

おまえは探さなかったのか

おまえは不安ではなかったのか

歓びはそれ程全かったのか

僕はそれ程信じられたのか

僕はおまえの歓びの中にいた

おまえの中で愛は全かった

だが闇は終っていなかった

僕はみつめていた

僕はたしかめることが出来なかった

おまえは何処にいたのか

僕は遠くまで行った

……おまえは許してくれるか

地球へのピクニック

ここで一緒になわとびをしよう　ここで
ここで一緒におにぎりを食べよう
ここでおまえを愛そう

おまえの眼は空の青をうつし
おまえの背中はよもぎの緑に染まるだろう

ここで一緒に星座の名前を覚えよう

ここにいてすべての遠いものを夢見よう

ここで潮干狩をしよう

あけがたの空の海から

小さなひとをとって来よう

朝御飯にはそれを捨て

夜をひくにまかせよう

ここでただいまを言い続けよう

おまえがおかえりなさいをくり返す間

ここへ何度でも帰って来よう

ここで熱いお茶を飲もう

ここで一緒に坐ってしばらくの間

涼しい風に吹かれよう

『ことばあそびうた』より

かつば

かつばかつばらった
かつばらつばかつばらった
とつてちつてた
かつばなつばかつた
かつばなつばいつばかつた
かつてきつてくつた

いるか

いるかいるか
いないかいるか
いないかいないか
いつならいるか
よるならいるか
またきてみるか
いるかいないか
いないかいるか
いるいるいるか
いっばいいるか
ねているいるか
ゆめみているか

『ことばあそびうた また』より

うそつききつつき

うそつききつつき
きはつつかない
うそをつきつき
つきつつく
うそつききつつき
つつきにつつく
みかづきつくろと
つきつつく

『わらべうた 続』より

まんじゆう

まんじゆう いくつくう
じゆうろく くう
まんじゆう いつくう
しじゆう くう
まんじゆう どこでくう
どうちゆうで くう
まんじゆう どうくう
むちゆうで くう
まんじゆう うちゆう
しきそくぜくう

『わらべうた 続』より

なんにもいらぬ ばあさま

なんにもいらぬ ばあさまがいた
いえはいらぬと ちかどうぐらし
きものもいらぬと ふゆでもはだか
かねもいらぬと まんびきばかり
じぶんもいらぬと あっさりしんで
しぬのもいらぬと またいきかえる

『ことばあそびうた また』より

ほつとけ

いけはほつとけ
こけはほつとけ
たけはきつとけ
おけはおいとけ
つけはほつとけ
ふけはとつとけ
はけはほしとけ
かけはまけとけ
ごけはほつとけ
みけはかつとけ
さけはさけとけ
やけはやめとけ

あいうえ

男と女が箱に座っている。

女 あー、いうえ。
男 おか。きく？
女 けこ
男 さ：
女 しすせ そたちつ
男 てと、てと。
女 なに？
男 ぬねのは、は、は、は！…（笑う）
女 ひふ
男 へほー。
女 まア みむめも。
男 やい
女 ゆえ？
男 よらり
女 るる。
男 れー
女 ろ。
男 ワツ！
女 いイ！ ウツ！
男 え？
女 おウ！
男 が。
女 ぎぎぎ！
男 ぐげ。
女 ござじ
男 ず
女 ぜぜぜぞだ！
男 だ？
女 ちづで

男 ど？
女 ば！
男 びイ びイ。
女 ぶべー
男 ぼ：
女 ばび。
男 ぶッ！（吹き出す）
女 べぼ。

間

男 あかきたな、はま。
女 やらわ、いき。
男 しちにひみいりい。
女 うくす？
男 つぬふむ、ゆるう。
女 え！ けてねへ、めえれえお。
男 こそとの。
女 ほも！
男 よろお！
女 （男を平手打ちする）
男 ん！
男と女、一瞬凍りつき、暗弩

詩集『これが私の優しさです』より

朝のリレー

カムチャッカの若者が
きりんの夢を見ているとき
メキシコの娘は
朝もやの中でバスを待っている
ニューヨークの少女が
ほほえみながら寝がえりをうつとき
ローマの少年は
頭を染める朝陽にウインクする
この地球では
いつもどこかで朝がはじまっている
ぼくらは朝をリレーするのだ
経度から経度へと
そうしていわば交替で地球を守る
眠る前のひととき耳をすますと
どこか遠くで目覚まし時計のベルが鳴ってる
それはあなたの送った朝を
誰かがしっかりと受けとめた証拠なのだ

詩集『うつむく青年』より

生きる

生きているということ
いま生きているということ
それはのどがかわくということ
木漏れ日がまぶしいということ
ふつと或るメロディを思い出すということ
くしやみをする
あなたと手をつなぐこと

いまどこかで兵士が傷つくということ
いまぶらんこがゆれているということ
いまいまがすぎてゆくこと
生きているということ
いま生きてるとということ
鳥ははばたくということ
海はとどろくということ
かたつむりははうということ
人は愛するということ
あなたの手のぬくみ
いのちということ

ありがとう

『子どもたちの遺言』より

空 ありがとう
今日も私の上に来てくれて
曇っていても分かるよ
宇宙へと青く広がっているのが

花 ありがとう
今日も咲いていてくれて
明日は散ってしまうかもしれない
でも匂いも色ももう私の一部

お母さん ありがとう
私を生んでくれて
口に出すのは照れくさいから
一度つきりしか言わないけど

でも誰だろう 何だろう
私に私をくれたのは？
限らない世界に向かって私は呟く
私 ありがとう

生きているということ
いま生きているということ
泣けるということ
笑えるということ
怒れるということ
自由ということ
生きているということ
いま生きているということ
いま遠くで犬が吠えるということ
いま地球が廻っているということ
いまどこかで産声があるということ